

日本語表現 基礎問題

問題 1 次の文章には、下のア～エの誤りが含まれている。() 内の数字は、誤っている部分の数である。誤りを指摘し、訂正しなさい。

直木賞の名前でも知られる作家の直木三十五は、本名を植村宗一という。直木三十五と名前はペンネームで、「直木」という性は本名にある「植」という文字を「木」と「直」に分解してつけたものであり、名のほうは三十五歳という、そのペンネームをつけた当時の年齢を表している。

ですが直木のペンネームは、初めから「直木三十五」ではなかった。直木がペンネーム使い始めたのは三十一歳のときだったが、実はこのときは「直木三十五」ではなく、「直木三十一」と名乗っていたんだ。しかも直木は、翌年は三十二歳だから「直木三十二」、その翌年は三三歳だから「直木三十三」とペンネームを変え、実年齢だけじゃなくペンネーム上でも年を重ねたのです。しかし三十五歳で「直木三十五」となった後はペンネームに年を取らせず、昭和九年、四十三歳で無くなるまで「直木三十五」と名乗り続けたのであった。

- ア 誤字・誤表記がある (2)
- イ 脱字がある (3)
- ウ 話し言葉の表現が使われている (2)
- エ 常体(だ・である)ではなく敬体(です・ます)が使われている (2)

問題 2 次の 1～20 の意味を表す語句を、ア～ウの中から一つ選びなさい。

1. 物事を比較して考えるとき、その判断や評価の基礎となるもの。
ア 水準 イ 標準 ウ 基準
2. 責任や決定権を持っている上位者が、部下の出した案の可否を決めること。
ア 決裁 イ 裁決 ウ 判決
3. 遠い過去に起こった物事の始まり。
ア 根源 イ 起源 ウ 源泉
4. 品物や風習などの盛んだったもの、流行したものの勢いがおとろえて使われなくなったり、通用しなくなったりすること。
ア くちる イ すたれる ウ ほろびる
5. 多くの人が話題にして、盛んにほめること。
ア ありがたがる イ たたえる ウ もてはやす
6. 利害や立場などが異なる者同士が互いに協力すること。
ア 協調 イ 妥協 ウ 調和
7. 相手をすっかり信用して、全面的にものごとを任せる。
ア ゆだねる イ 任ずる ウ 委託する
8. 天候や病状、ものの考え方など、これまで続いてきた物事が急激に変化する様子。
ア いきなり イ おもむろ ウ にわか
9. 不利な条件や逆境などの困難に負けず、よく努力してがんばって戦う。
ア 闘争する イ 健闘する ウ 係争する
10. 気分が沈んで、しんみりと悲しそうな様子。
ア ひめやか イ しめやか ウ ひそやか

e 小論文 I (第 1 回)

11. 自分の理想とする姿に育て上げること。
ア 扶養 イ 養護 ウ 育成
12. 理論だけで実際には役に立たない考え。
ア 紙上の討論 イ 盤上の理論 ウ 机上の空論
13. 悪事を働くグループのメンバー全員を、一度にとらえること。
ア 百発百中 イ 一石二鳥 ウ 一網打尽
14. 人に知らせないで秘密にしておくという意味を持つ、少しくだけた日常語。
ア 内緒 イ 極秘 ウ 秘匿
15. 服のすそや態度などが、何かのきっかけでさっと裏がえる。
ア はためく イ ひるがえる ウ なびく
16. その物事に関係のない立場や野次馬のような態度で、手を出さずに見ている。
ア 傍観する イ 静観する ウ 概観する
17. 大勢の人や多くのものが、一度に激しい勢いで押し寄せること。
ア 到来 イ 殺到 ウ 到着
18. その家に代々伝わってきた職業。
ア 屋号 イ 家業 ウ 生業
19. 骨を折ってくれたことを感謝していたわる。
ア 体をねぎらう イ 労をねぎらう ウ 世話をねぎらう
20. 慣習やしきたりのこと。
ア あわい イ つたえ ウ ならい

e 小論文 I (第 1 回)

問題 3 下の文の下線部 1～5 のそれぞれの係り先を答えなさい。係り先とは、主語に対する述語、修飾語に対する被修飾語などのことである。

例 私が眼鏡をかけたのは、視力検査で近視だと言われた中学一年の時からである。
「かけたのは」(主語)の係り先は、「時からである」(述語)
「視力検査で」(修飾語)の係り先は、「言われた」(被修飾語)

¹日本語では、その文章のキーワードとなる単語を漢字やカタカナで書くことが多いので、漢字やカタカナに注目しながら²読むと、斜め読みでも内容をだいたいつかむことができ、また、³カタカナは⁴欧米から輸入された概念や外国人の人名・地名を表すのに使われるので、翻訳書では、⁵カタカナの方が漢字より重要な役割を果たしているかもしれない。

問題 4 次の 1～5 の文を正しい文にするために、最も適当な語をア～ウの中から 1 つ選びなさい。

1. 固く約束したのだから、(ア まさか イ さも ウ かりに) 裏切るようなことはしないだろう。
2. コンピュータの進化の影響は、おそらく学校の授業形態にも変化を (ア 及ぼすようだ イ 及ぼすかもしれない ウ 及ぼすだろう)。
3. 宿題がたくさんあったので、なかなか (ア 終わるだろう イ 終わりそうになかった ウ 終わりそうだった)。
4. そんなことがたとえ (ア あったが イ あったようだが ウ あったとしても)、力を落とすことはない。
5. この発明は、必ずや (ア 歴史を変えるかもしれない イ 歴史を変えるとは限らない ウ 歴史を変えることだろう)。

小論文の書き方① —「説明」の方法—

小論文というと、「自分の考えを書く」「意見を書く」という点が強調されがちです。もちろん、それも必要なのですが、ちょっと思い違いをしている人が結構いるのです。そこで、「小論文」とはどんな文章なのか、少し考えてみましょう。

小論文は、長さの面でも内容の面でも小さい「論文」です。入試では試験時間などの制約がありますから、「小さい」ものにせざるを得ないのですが、「論文」であることには違いありません。「論文」には、通常の見解文や論説文と大きく異なる点があります。それは、たとえ学生が書いたとしても、「学問」の一部であるという点です。

「学問」は、粘り強い議論の積み重ねでできています。学問にたずさわる人は、その議論の中で自分の意見を出したり、他人の意見を批判したりしますが、その目的は決して議論に勝つことではなく、議論を通して物事の理解を深めることです。そのためには、自分の意見を出すよりもまず先に、他人の意見を良く理解し、その良い点と悪い点を分析しなければなりません。そして、他人の意見を発展させたり、欠点を補ったりするために自分の意見を出すのです。

ですから、入試の小論文でも、第一に、「他人の意見」にあたる「課題文」をしっかり理解しなければなりません。そして、その中で展開されている議論の長所や短所を検討していきます。その点では、小論文の基礎として現代文の読解力が不可欠です。ただし、現代文の場合は選択肢や抜き出しで答えたり、長くてもせいぜい 80 字程度で説明したりすればいいのですが、小論文では課題文の内容を 100～500 字程度で要約する必要があります。つまり、読解力と表現力を合わせた力が必要だということです。

そこで今回は、小論文学習の第一歩として、課題文の内容を読み取って、その内容を説明する問題に取り組んでみましょう。

では、次ページの例題の課題文を読んでください。

例題 つぎの文章は、脳のごく一部に卒中が起こり、「失算症」と呼ばれるまれな認知障害をきたした脳卒中患者について書かれたものです。これを読んで、問 1、2 に答えなさい。

私は少し前に、ビル・マーシャルという名の紳士を診た。彼はその一週間前に卒中を起こし、回復の途上にあっただが、陽気で明るく、今後の生活や病状を話題にすることもなかった。家族のことをたずねると、子供たちの名前とそれぞれの職業をあげ、孫たちのことをくわしく話してくれた。話し方はなめらかで、知性的で、発音も明瞭だった。一卒中発作からいくらかもたない時期に、だれもがここまで回復できるわけではない。

「どんな仕事をなさってたんですか？」と私はたずねた。

「空軍のパイロットでした」

「機種はどんな？」

ビルは機種の名前をあげ、「当時は、地球最速でした」と言った。そして、その航空機がどれくらい速かったかを説明し、ジェットエンジンが導入される前に造られたものだと教えてくれた。

次にわたしはこう言った。「ではビル、100 から 7 をひいてみてくださいか。100 ひく 7 は？」

「100 ひく 7 ですね？」

「そうです」

「えー、100 ひく 7 と」

「そう、100 ひく 7 です」

「100 ですね。100 から 7 をひいてみてくれとおっしゃるんですね。100 ひく 7」

「そうです」

「96 ですか？」

「いいえ」

「おや」

「問題を変えましょう。17 ひく 3 はどうです」

「17 ひく 3 ですか？ こういうのはあまり得意じゃないんですよ」

「答えは小さくなりますか？ それとも大きくなりますか？」と聞くと「小さくなります」と答えた。引き算がどんなものかは知っているらしい。

「結構です。では 17 ひく 3 は？」

「12 ですか？」ようやく彼はそう答えた。

e 小論文 I (第 1 回)

そこで私は、ビルが数字というものを、あるいは数字の性質を理解していないのではないかと考えはじめた。何と言っても数字の問題は、ピタゴラスまでさかのぼる古くて深遠な問題だ。

私はたずねた。「無限とはどんなものですか？」

「一番大きな数のことです」

「101 と 97 ではどちらが大きいですか？」

彼は即答した。「101 のほうが大きいです」

「なぜでしょう」

「桁が大きいからです」

つまりビルは、桁数のような高度な数字の概念を、少なくともなんとなくは理解しているのだ。それに 17 から 3 をひくことができないといっても、ばかげた答えを出しているわけではない。75 だとか 200 だとかいうのでなく、「12」だと答えているところを見ると、概算はできるようだ。

そこで私は小話をすることにした。

「ある日一人の男が、ニューヨークの自然史博物館の恐竜展に行って、巨大な恐竜の骨格を見ました。どれくらい前のものか知りたくなり、隅に座っていた年配の館員のところに行ってきたずねました。「ちょっとかがいますが、あの恐竜の骨はどれくらい古いものなんですか？」

館員は男の顔を見て、「6000 万 3 年です」と答えました。

「6000 万 3 年ですって？ 恐竜の骨の年代がそんなに正確にわかるなんて考えられない。どういう意味なんですか、その 6000 万 3 年というのは？」

「それはですね、3 年前に私がここに就職したときに、あの骨は 6000 万年前のものと教わったんですよ」

ビルは落ちのところで声をあげて笑った。

(V. S. ラマチャンドラン、サントラ・ブレイクスリー著 山下篤子訳『脳のなかの幽霊』 角川書店 1999 年 p.48-50 より抜粋 一部改変)

問 1 恐竜の骨に関する小話は、なぜおかしいのですか。その理由を 200 字以内で書きなさい。

問 2 ビルの失算症とはどんな障害であるのか、文章から読み取れることを、200 字以内に要約して書きなさい。

読めましたか？ では、どのように問題に取り組みばよいでしょうか。

1. 読解の手順

読解は「外側」から

読解は、まず「外側」から行います。「外側」とは、課題文の内容ではなく、問題の最初の説明や、設問の指示、さらに課題文の長さやタイプ、出典表示などの情報を指します。この問題では最初に、「失算症」という認知障害に関する文章だという説明があり、さらに出典の題名から、おそらく脳科学分野の研究の具体例だろうと推測することができます。そして、設問は2問とも説明問題ですね。

課題文のジャンル

「脳科学」と言われても、どんな研究が行われているかまったく知らないと思っている人もいるでしょう。ですが、近年、現代文で出題される文章の中には、養老孟司さんや茂木健一郎さんなど脳科学者の文章がけっこうあることは知っていてほしいですね。「考える」ということの不思議さを考えるために、哲学的な文章よりも最新の科学の見方を材料とした文章が多くなっているのです。

課題文をセクションに分ける

課題文の内容も学問の一部ですから、これまで常識とされてきたことを疑ったり、新たにわかったことを示したり、あるいは研究成果を紹介したりするものであるはずです。この課題文でも、筆者は「失算症」という障害を通して、何か「考えること」に関する見方・考え方の材料を伝えようとしているはずです。そこで、書く人の立場になって、文章のそれぞれの部分で何を伝えようとしたかを考えましょう。課題文全体をいくつかのセクションに区切って考えるといいでしょう。

第1セクション (11行目まで)

ビルが回復しており、普通の点では知的能力に問題がないことを説明している。

第2セクション (ビルが「12ですか？」と答えるところまで)

ビルが、引き算を知ってはいるが、計算はできないことを示している。

第3セクション (「概算はできるようだ」まで)

ビルが、数学の概念は理解していることを示している。

第 4 セクション (最後の「小話」の部分)

「そこで」で始まる文章展開になっていることから、筆者が小話を使って前の段落で考えた推測を確認したということを示す部分であると考えられる。

読み取った材料を整理する

以上から、「失算症」に関する次のような事実が読み取れます。

- ・ 通常の知的な能力には問題がない
- ・ 引き算で答えが元の数より小さくなることを理解している
- ・ 「無限」の意味を知っている
- ・ 桁数について、少なくともなんとなく理解している
- ・ 概算はできる

自分の経験や知識を照らし合わせる

ここでちょっと、自分が小学生の頃、どうやって引き算ができるようになったかを思いだしてみましよう。普通は 1 桁の引き算から練習しますよね。桁が大きくなると繰り下がりが出てきて間違えやすくなりませんか？ それから概算は少し学年が上がってから習いませんでしたか？ それに「無限」なんて高校になってから出てきますよね。そう考えると、ビルの症状は小学生が引き算で間違ふのとはずいぶん違っていることが分かるでしょう。難しいことを理解しているのに、一番簡単な部分ができないのです。

以上で、課題文の内容検討はいいですね？ では次に行きましょう。

2. 設問の要求に応える

形式的な要求に応える

設問 1 です。設問 1 は「恐竜の骨に関する小話は、なぜおかしいのですか。その理由を 200 字以内で書きなさい」というものです。小話が面白い理由を説明すればいいわけですね。すると、答案の最初か最後に、「・・・だからである」とか「・・・という理由である」とか「理由は・・・である」などと、**理由説明の形式を使う**必要があります。字数は 200 字です。解答用紙のマスは、通常は原稿用紙と同じように扱います。

内容的な要求に応える

では、なぜおかしいのでしょうか。答案作成のコツは、やはり読解にあります。第 4 セクションは「そこで」で始まっています。その前の段落で筆者は、ビルが「桁数」を理解し、「概算」ができる「ようだ」と推測していますから、「そこで」は、そのことを確認するために筆者が小話をしたことを示しています。ですから、「小話」の「オチ」の面白さも、[桁数や概算に関係している](#)と考えることができます。

「6000 万年」という桁数の大きな数を使う場合は、概算で問題となるのはせいぜい 1 万年単位までで、それより細かい数はどうせ正確に測ることができないので無視してしまうはずですが。ところが、館員は「3 年」という意味のない細かい数字に妙にこだわっています。ということは、館員は「6000 万年」という数字を教えられたときに、それが概数ではなく 1 年単位まで正確な数字だと受け取っていたことになりすね。

そして、この小話で笑ったビルは、館員と違って、「6000 万年」が概数であることを理解できたということになります。

答案に含める要素

以上から、答案に入れるべき言葉や要素が分かります。

- ・「6000 万年」が 1000 万年を単位とした概数（概算）であること
- ・「3 年」のように細かい数字には意味がないこと
- ・館員が概数というものを理解せず、正確に 6000 万年前だと考えていたこと
- ・「桁数」という言葉

問 1 の答案例

この小話がおかしい理由は、館員が概算を理解せず、年代を 1 年単位まで正確に扱っている点にある。6000 万年のように桁数が大きい数字は、通常は概数として扱い、問題とするのはせいぜい 1 万年単位までである。それより小さい数は、正確に測ることができないため、考えても意味がない。ところが館員は、6000 万年を 1 年単位まで正確な数字と考えて、自分が勤務した 3 年を加えている。このスケールの混同が、小話のおかしさの理由である。

(200 字 原稿用紙では算用数字は 2 桁で 1 マスを使うので 196 字扱い)

わかりましたか？ では最後に、設問 2 の答案を作りましょう。

3. 要約する

課題文を書いた目的を考える

文章の要約とは、単に文章を短くまとめることではありません。筆者の立場になって文章を通して伝えたかったことを考え、それを取りだして分かり易く簡潔に説明したものが要約です。小論文の場合は、とくに中心となっている問題、その問題に対する筆者の考え方と主張、主張の根拠などが重要です。今回の課題文は、「失算症」の症例を説明したのですが、筆者が「失算症」の何を伝えたかったのかを考えます。

驚きや疑問に注目する

皆さんが、「どうしても友だち・家族に話したい」と感じる物事は、きっと皆さんが驚いたことや面白かったこと、あるいは怒りを感じたことだと思います。課題文の筆者が伝えたいと思うのも、やはり興味深いことや疑問に思うことです。「論文」ですから、ストレートな驚きや怒りの感情は示されていませんが、文章の中には、何か普通とは違うことや違う意見、あるいは疑問があって、それを分析したい、意見を言いたいという気持ちが隠されているはずです。

この「失算症」では、先に説明したように、高度な数学の概念は理解しているのに、初歩的な引き算だけができないという点が興味深いところです。このことから、脳の中で、高度な概念を操る部分と単純な計算を行う部分が別れていて、ビルの場合は卒中によって脳の計算に関係する部分だけに障害が残ったことを示しています。筆者は、脳を研究する上で、その点が面白いと思っているのです。

段落の展開

さて、答案を作っていきましょう。設問は、「ビルの失算症とはどんな障害であるのか、文章から読み取れることを、200字以内に要約して書きなさい」というものでした。ですから、まず、「ビルの失算症とは・・・障害である」と設問の要求に簡潔に答えましょう。このような設問の要求に対する「答えの中心の文」を答案のメイン・アイディアと言います。今回のように答案を1段落でまとめる場合は、メイン・アイディア＝段落の中心文（トピック・センテンス）になります。段落のその他の文は、サポートینگ・エビデンスと呼ばれ、トピック・センテンスを詳しく説明してサポートしたり、トピック・センテンスが正しいことの証拠（エビデンス）を示したりします。

サポート文の書き方

設問 2 の答案のトピック・センテンスは、「ビルの失算症とは、脳の一部の損傷によって単純な引き算ができなくなる障害である」などとなります。その後は、どうサポートしたらいいでしょうか。

上で説明したように、要約では筆者が面白いと感じているポイントが大切ですから、この「失算症」が高度な数学的概念が理解できないこととは違う、ということを説明したいですね。これは「**何でないか**」の説明です。常識的な物事やこれまでの見方・意見と違うという説明です。

しかし、それで終わってはいけません。「リンゴって何ですか」「ミカンとは違います」では、たしかに正しいけれど、説明にはなっていません。必ず「**何であるか**」の説明が必要です。「100 ひく 7」や「17 ひく 3」という事例をそのまま書いてもいいのですが、ここでは、そのような計算を一般的な表現で（具体的な計算例ではなく**一般化して**）説明します。そして最後は、全体をまとめて、もう一度「失算症は・・・である」と終わらしましょう。

一般化＝具体的な物事をまとめた捉え方・表現にすること。たとえば、「リンゴ」「ミカン」などは「果物」と一般化でき、「果物」「野菜」などはさらに「食べ物」と一般化できる。

問 2 の答案例

ビルの失算症とは、脳の一部の損傷によって単純な引き算ができなくなる障害である。彼は、引き算によって数が小さくなることや桁数という高度な概念は理解している。また、答えの誤差がわずかであることから、概算はできると考えられる。しかし、3桁の数から1桁の数を引く計算や、2桁の数から1桁の数を引くことができない。つまり、失算症は、数学的な概念を理解しているのみ関わらず、単純な計算のみできなくなる障害である。(200字)

答案例に、何がどのような順序で書かれているか、よく見てくださいね。

小論文問題

次の【問題文 A】及び【問題文 B】を読んで、問に答えなさい。

【問題文 A】

「子どもを理解する」とか、「子どもをわかる」というとき、読者の皆さんはどういう状態をイメージするだろうか。子どもをどのようにわかったとき、「理解できた」とか「わかった」と感じられるのだろうか。

たとえば、「あの子は自分勝手だ」とか、「〇〇君は忍耐力が足りない」といったふうに子どもを見ることがある。ここでは、こうした見方を「理解する」ということの中には含めないことにする。これらはむしろ評価であり判断である。別の言い方をすれば、「レッテル貼り」である。こうした見方をしたとしても、そのときの子どもの気持ちの動きはわからない。逆に言えばむしろ、自分には理解できないからこそ、そうした理解できない行動について「自分勝手」や「忍耐力が足りない」というレッテルを貼って、なにかわかったような気持ちになって安心しようとしているにすぎない。

このことは、上に挙げたような子どもに対する否定的な評価に限るものではない。たとえば、「△△さんは頭がいい」「〇〇君はよく気が利く」といった肯定的な評価についても同様である。これらもその子についてのあるわかり方には違いないが、その子どもが今ここでどんな気持ちでどんなことを考えて生きているのか、ということとは無関係のわかり方である。そういう意味では、これらもある種のレッテル貼りである。子どもにとってみれば、「自分勝手」のように否定的に見られるよりは、このように肯定的に評価された方が基本的にはうれしいことではあるだろうが、このようなわかり方では、先生に自分のことをわかってもらえた、という実感はもてないのではなかろうか。

それでは、どのようなわかり方を私たちは目指すべきなのだろうか。先に挙げた例、すなわち「自分勝手だ」といった否定的な評価にしても、「頭がいい」といった肯定的な評価にしても、そのとき「なるほど、そうか、わかった」という喜びのようなものは感じられないだろう。あるいは、どこか自分から遠い存在に見えていた自分にはよくわからない子が、急に近く感じられるということも起こらないだろう。

逆に言うと、ここではこのようなわかり方を「子どもを理解する」という言葉で現したいと思う。つまり、よくわからなかった子のことが、あるちょっとした言動がきっかけで、あるいはその子について採っていた記録を丁寧に読み返す中で、「なるほど、そうか、この子はこんなことを感じていたんだ」と、ある種の喜びや感動とともに

e 小論文 I (第 1 回)

に見えてきて、その子を前よりも近しく感じるができるようになること、そういうこととして「子どもを理解する」と言うことにしよう。

ところで、このような意味で「子どもを理解する」ということは、何がわかるようになったということなのだろうか。「自分勝手」や「頭がいい」といったレッテル貼りではないのだから、その子の性格や特徴がわかるようになった、ということとは明らかに違う。かと言って、その子の気持ちがわかるようになった、というのやや不正確である。泣いている子を見て、その子が悲しんでいることがわかったとしても、それだけでは「なるほど、そうか、この子はこんなことを感じていたんだ」とまでは感じられない。このとき私に起こったことは、その子がどんな世界を生きているかが私にある程度わかった、ということである。

【問題文 B】

「はだかの王様」の中の「王様の行列は～」という文章を勉強しているとき、ある子どもが「ねえ、王様は何人いるの？」と突然尋ねたという。そう言われて「何をばかなことを言ってるんだ。王様は一人に決まっているだろう」と思わないだろうか。しかしこの子がこう問いたくなかったのにはそれなりの意味がある。読者の皆さんはおわかりだろうか。

この子は別の教材で「アリの行列」という言い方を学んだ。アリの行列とは言うまでもなく、アリが何匹も連なっているものである。この子はだから当然「王様の行列」とは王様が何人も連なって歩いているとイメージしたのである。

(守屋 淳 『子どもとともに育つ「技」』)

問 【問題文 A】で述べられたことを基にして、300 字～400 字で、【問題文 B】の事例について説明しなさい。

小論文問題 答案作成のヒント

このヒントをもとに、答案を作成してください。

1. 課題文の読解

第 1 段落 → 問題提示

「子どもを理解する」とは、どのようなことか。

第 2 段落・第 3 段落 → 「何でないか」

「レッテル貼り」

「その子どもが今ここでどんな気持ちでどんなことを考えて生きているのか、ということとは無関係のわかり方」

⇒ 子どもを大人の基準にあてはめて、評価・判断すること

第 4 段落以降 → 「何であるか」

「どのようなわかり方を私たちは目指すべきなのだろうか。」

「よくわからなかった子のことが、・・・ある種の喜びや感動とともに見えてきて、その子を前よりも近しく感じることができるようになること」

「このとき私に起こったことは、その子がどんな世界を生きているかが私にある程度わかった、ということである。」

⇒ 子どもの見方・考え方に気づくこと

2. 設問の要求

「【問題文 A】で述べられたことを基にして」

→ 問題文 A を要約しよう

「【問題文 B】の事例について説明しなさい」

→ 要約の内容を問題文 B にあてはめよう

「300 字～400 字で」

→ 要約が 150～200 字 (第 1 段落)、あてはめが 150～200 字 (第 2 段落)

3. 答案の展開

第 1 段落

1. (書き出し)「問題文 A によると、「子どもを理解する」とは、・・・である。」
2. 「何でないか」の説明
3. 「何であるか」の説明

第 2 段落

1. 「何バカなことを言っているんだ」が「レッテル貼り」であることを指摘する
2. 「しかし」「だが」などと逆接で展開する
3. 子どもの問いの意味を説明する